

アジアクラブ第2回議事録（要約版）

（はじめに）

当 NPO 法人の分科会のひとつアジアクラブでは、前回の「タイ」に引き続き、今回は上海について最近の情勢をまじえて長谷川様からお話を頂くことになった。現在、100年に一度という未曾有の経済不況下にあっても8%の経済成長率を維持していかないと格差社会になるといわれている中国とりわけ上海がこうした状況下で占める位置は非常に高いものがあると思われる。上海市は大阪市と提携都市であり、2010年には上海万博も開催が決まっている。そういう意味においても話題性に富んだ上海について今日的な話題も含めて聞ける事は有意義であると考えている。

（津浦会長挨拶より抜粋）

・ 講演 『上海よもやま話』

講師 長谷川 ^{かずと} 万人 様

（関包スチール株式会社 執行役員・同社 シャンハイ

兼バンコク事務所長・上海現地合弁会社 ^{しやんふ} 翔虎金属董事長）

・ 講演の要旨

独断と偏見も交えての「よもやま話」として捉えて聞いて欲しい。

話の前半は上海の歴史、観光、生活など上海の散歩探歩編、後半は鉄関係に従事していたので、鉄鋼産業界にまつわる経済人としての話とする。

（前半の部・散歩探歩編）

要約すると、四～五千年前の歴史がある中国ですが上海は昔栄えた街ではなく漁村であった。唐時代には貿易港として、清時代にはお茶、木綿、大豆などの穀類等海運の港町として栄えていた。1842年のアヘン戦争後は租界、貿易港としてアジア最大の国際都市として発展していった。1990年代、湖東地区は国家プロジェクト開発が進み、1992年鄧小平の「南巡講和」以降は貿易・金融・保険など多機能を持った都市として急ピッチで開発が進み現在も継続している。（中国東部図参照）

中国は一般的には華北（北京・天津など）、華中（上海・江蘇省・浙江省など）、華南（広東省など）に区分できる。上海は華中、華東とも呼ばれるがその中心都市。

北京が中国の政治、文化の中心都市であれば、上海は金融、保険、貿易など中国の経済の中心都市である。緯度は鹿児島県とほぼ同じだが、気候は東京、大阪と良く似ている。揚子江の下流域は江南（揚子江の南という意味）地方とも呼ばれ豊かな土壌、豊かな農家というイメージの地域。上海は揚子江の河口に位置し、上流の重慶、武漢、南京などから物資が船で多量に運ばれてきている。鉄道もあるので武漢鋼鉄等揚子江沿いにある高炉メーカーなどの製品も上海を経由して海外に輸出される拠点ともなっている。 地図参照（上海周辺図）

長江は揚子江であるが、そこにある崇明島は中国で三番目の大きな島である。参考

までに中国では一番目は台湾、二番目は海南島と言われている。

上海市の位置関係は西に蘇州、無錫、太湖、南に杭州、紹興、寧波がある。杭州湾上に架かった杭州湾跨海大橋は海上大橋。昨年（2008年）開通した。車での通過所要時間は僅か40分。上海から寧波までの距離はこれまでの304kmが179kmに短縮できた。時間では一時間以上短縮された。また、南通という日系企業の多い大きな街の近くには揚子江に架かる橋が開通されている。さらに崇明島系由の橋を建設中である。

これ等の開通で揚子江の向かい側にある地域の物資輸送はこれまでより大幅に短縮された。浦東国際空港は国際線、虹橋国際空港（旧上海空港）は国内線専用である。但し、羽田へはここからシャトル便があるが関西空港へは無い。浦東には日系企業もシャープ、パナソニックなどが進出してきている。陽澄湖は上海カニが獲れ、鑑札を付けて偽者と差別化している。 地図参照（外灘／浦東）

黄浦江を挟んで東に金融センターの中心街が開けている。香港、シンガポールを凌駕して東京を抜きアジアNO1を目指している。早く開発できるのは奥地からの出稼ぎ労働者が24時間交替勤務で建設稼働しているためだと思っている。地下鉄でも高速道路にしてもとにかく（計画から完成まで）早い。

上海環球金融ビルは地上101階、高さ492mで森ビルが昨年竣工させた。日系人の間では第2森ビルと呼ばれている。第1森ビルは現在香港上海銀行があるビルで日系企業が沢山入居した。これができるまでの高いビルは金茂大廈ビルだった。更に近くには世界一高いビルの建設計画がある。

リニアモーターカーは朱鎔基首相と当時のドイツ首相との間で調印されドイツの技術で建設された。幾度か乗っているが、瞬間430キロ、飛行機の離着陸の早さくらいのスピードである。早くて時間定刻に走る。浦東国際空港までは8分間で30kmの全行程を走っている。誰でもいつでも乗れる。北京と上海間は、リニアモーターカーは導入されずに新幹線タイプ的高速鉄道が建設されると聞く。地図参照（上海市街図）

上海の観光スポットは外灘と豫園である。豫園は明の時代に個人が両親のために建てて親孝行した建物と伝えられている。浅草のような庶民的、下町的な雰囲気のある仲見世のような店が並んでいる。

駐在員が利用するマンションの賃料は、2LDKが15～30万円というのが一般（標準）の日本人が住む価格。家電製品など殆どのものがマンションに装備されていて入居はすぐできる。うどん、丼など日本食は何でも揃い上海には日本食店が300～500店舗在るといわれている。

上海発展の象徴は地下鉄であると思う。1999年上海を離任した時、地下鉄は1本も無かった。ここ10年間の間に建設が進み現在では9本も走っている。2012年までに点線表示された建設中路線が開通すると、まるで東京や大阪のように縦横無尽の地下鉄網が完成する。前述のとおり、それこそ24時間稼働のなせる業である。北京－上海間の新幹線は、上海駅設置場所が虹橋空港と既に決まっている。

上海には 29 の大学がある。復旦大学（文系）、上海交通大学（理工系）、同済大学（土木・建築系）の三大学に優秀な学生が集まってきている。上海音楽学院には日本の歌手谷村新司さんが講師されている。江沢民、朱鎔基など著名な政治家をはじめいろんな分野で優れた人材が上海から輩出している。会社のマネージャークラスは上海市内から、ワーカーは地元や出稼ぎ労働者から雇用されている。上海人の結束は固いと感じている。

為替レートは 1 ドル 14 元程度。水は硬水で飲めずにミネラルウォーターを利用する言語は上海語で中国人はズウズウ弁だと言う人もいる。上海人同士は上海語を使って会話する。上海人の気質は頭の回転が速く、商売が上手い。また、上海の女性は強く、しっかりしている。

（後半の部 鉄鋼を中心とした経済編）

最高時速 350 km で走る新幹線を北京―天津間だけでなく他の在来線にも走らそうと計画されている。旅客専用線のネットワークを「4 縦・4 横」と称されるプランがある。鉄道建設の総額は 4 兆元（約 47 億円）で景気刺激策の主要メニューとして注目されている。2009 年は、鉄道インフラ建設 6000 億元、車両購入費 5000 億元、雇用創出 600 万人、鋼材需要 2000 万トン、セメント需要 1 億 2000 万トンといわれている。ドイツのジーメンス、フランスの G T V、日本の新幹線技術が競っている。北京―上海は 350 キロあるがこれができるとう 5 時間で結ばれる。

中国で日本企業の進出地は第 1 位が上海市、第 2 位が広東省、日本企業の進出先は上海を筆頭に沿海部に集中している。内陸部では北京に近い河北省と揚子江沿いに集まる。今後は中国の内需がテーマになっていく過程で進出地域も奥地などに広まっていきそうである。図表参照（日本企業はどこへ行く）

また、中国各地方政府の 2009 年度経済成長率目標は、上海市は 9%、内蒙古自治区と陝西省が 13%と最も高い。会長挨拶にもあったが、8%以上を維持しないと雇用など格差社会は広まる恐れがある。

以下は私が関係する鉄の産業領域について概観である。以下、お話しする対象地域は上海を含む中国全体のことについて述べる。

世界の粗鋼生産は 2000 年頃から過去に例がないほど、急激に増加している。世界の伸びを先導したのは中国の増産が大きく寄与している。2007 年では世界全体で 13 億トン。そのうち 5 億トンが中国で生産されている。

1980 年は旧ソ連が 1 位、日本は 1 億トン突破して 2 位。2007 年は 1 位が中国で約 5 億トン、2 位がロシアで 1 億 24 百万トン、3 位が日本で 1 億 20 百万トン、4 位が米国で 98 百万トン。中国は 2005 年 12 月以降輸出国となった。また、世界の粗鋼生産シェアは、2007 年現在、35%の中国が 1 位、EU27 ヶ国の 16%で 2 位、日本は 9%で 4 位。

2009 年 1 月の鉄鋼生産実績によると 1 月の前年同月比で世界の各国がマイナスにな

る中で、中国だけが2,4%プラス増と5ヶ月ぶりに増加した。

自動車販売台数は世界一。この不況の回復をリードしていくのは中国と言われているがそのような事例が数多く出てきているが、ルール変更、役人によってルールの運用が異なるなどのといったこともある。希望は、潜在成長力がまだまだあることだ。13億人口うち6～7億人の人口といわれる農村の人たちが、より良い生活したいという人間本来の欲求を満たすことやハングリー精神、バイタリティ等を持ち合わせている。

一方、日本は100年に一度といわれる不況のピンチをチャンスに変えていかなければならない。巨大需要地域である中国を日本は隣国に持っていること、環境、省エネなど日本が得意とする分野を持っていること、さらに器用さ几帳面さという日本人の特技気質。これ等を生かした企業や中小企業が中国に進出して活躍できるチャンスは充分あると考える。

会員をはじめ、中国関連の企業、多言語放送局FMCOLOLO、NPO法人上海交流クラブ、通信関係のNPO法人、日中友好協会、アジア協会、上海万博関係者など多彩な方々が参加された。講演終了後、自己紹介やそれぞれの企業、団体についてアピールがあり、懇談や交流が賑やかな雰囲気の中で行われた。

(平成21年3月5日(木) 15:00～17:00 日宝淀屋橋ビル3階ⅢP 研究所内)